

東病院

概要

東病院は平成4年に開院し、国立病院初の陽子線治療施設と緩和ケア病棟を設置。平成17年には臨床開発センターを併設しています。病院・臨床開発センター一体となって世界最先端の診断・治療法の開発に取り組んでおり、特に、低侵襲・機能温存手術、新規抗がん剤の臨床開発、新規内視鏡・画像診断機器開発、陽子線治療開発、緩和ケア地域医療連携モデル構築など、新しい診断治療法の開発を行い、日本人がん患者さんへの早期利益還元を目指しています。



トピックス

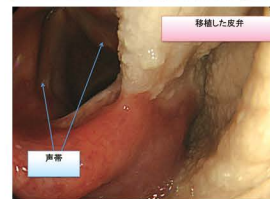
陽子線治療

米国ロマリンダ大学に次ぐ世界で2番目の病院併設型陽子線治療施設であり、1998年の臨床治療開始以来、その高い線量集中性を背景に頭頸部癌、肝臓癌、肺癌などを中心に癌治療の大きな武器となっており、現在も日本初となるスキャニング照射技術の臨床導入を目指して開発を進めています。



機能温存手術

当院で開発された下咽頭がんに対する喉頭温存手術。切除範囲は咽頭から喉頭に及びますが、遊離組織移植による再建で音声、嚥下機能とも保持。保存的切除と再建手技の導入により外科治療による機能温存が可能となりました。



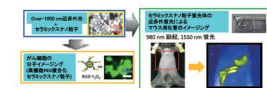
内視鏡外科

従来の開胸・開腹手術と同等以上の根治性と低侵襲性を両立した内視鏡外科手術の未来を切り拓きます。



近赤外光とナノ粒子を用いた内視鏡機器開発

1000nm以上の近赤外光は光散乱が極軽度であり組織の透過性にすぐれています。本研究では特殊なCCDを導入し画像化が可能になりました。さらにセラミックスナノ粒子蛍光体を使用することで超微小がんの発見や消化管の透見に寄与できる可能性があります。



地域緩和ケアモデル構築

少子・超高齢化・多死時代に向けて緩和ケア提供体制の構築とがん患者・家族の視点に立った、療養生活の質の向上を目指して、がん医療に係る医療・福祉・行政と協働し、地域緩和ケアモデルの構築に取り組んでいます。

